

ヴェルディ第5作目「エルナーニ」研修会に寄せて・・・お話し 錦職昭彦

2023/01/29 研修会教材

ミラノ・スカラ座管弦楽団 指揮・・・リッカルド・ムーティ

合唱指揮・・・ロマーノ・ガンドルフィ

台本・・・フランシスコ・マリア・ピアーヴェ

エルナーニ・・・プラシド・ドミンゴ

エルヴィーラ・・・ミレッラ・フレニ

ドン・カルロ・・・レナート・ブルゾン

ドン・ルイ・ゴメス・デ・シルヴァ・・・ニコライ・ギャウロフ

ヴェルディは一連のリソルジメント運動にかかわるオペラから脱却を考えていた。丁度その頃、ヴェネツィア・フェニーチェ劇場支配人カルロ・モチェニーゴ伯爵からヴェネチアの謝肉祭に合わせて、新作オペラの依頼がくる。

ヴェルディは次作の構想を一人でめぐらす。雄大であること、情熱的であること、多くの事件が絡み合いロマン的に、そして最後は簡潔に・・・このような構想を伯爵に打ち明ける。数日協議の結果「エルナーニ」が候補に挙がりヴェルディは了承する。

台本は伯爵の仲介で台本作家、詩人のフランチェスコ・マリア・ピアーヴェを起用することに決め、「エルナーニ」(1844/03)の台本作成を依頼する。これ以降ヴェルディ＝ピアーヴェのコンビで多くの作品を生み出した。詳しくは拙著「ヴェルディ」P85に著しています。

「エルナーニ」原作はヴィクトル・ユゴー (Victor Hugo 1802～1885) である。ここに描かれている人物、事件のキー・パーソンはフィリッポ2世の父親スペイン王カルロス1世、スペイン王から神聖ローマ帝国皇帝に即位しカルロス5世となる若き時代の話である。

ユゴーはなぜこの題材を戯曲に纏めたか？ ヴェルディはどうだったのか？

ユゴーは「エルナーニ」を1830年に発表している。当時、フランスの政治は1815年ナポレオン失脚後、王政復古を経由1830年パリ7月革命へと政治が激変した時代にこの「エルナーニ」が、続いて「逸楽の王＝王様はお楽しみ」が1832年に発表した。当然これらの作品について検閲が厳しく、また文学界にも強い政治の圧力が掛かってくる。

ユゴーは王政に対して強い反感をもって執筆していた。まさに、それが反乱者をも許す慈悲深いカルロス5世＝神聖ローマ帝国皇帝を描いて、他国の王は立